

中國兵亂記

六卷

解題

中國兵亂記

六卷

著者

中島元行

此書は、今を距ること殆三百年前、即元和元年備中賀陽郡刑部卿地頭にして、經山城主たりし中島大炊助元行が、父祖及び自己の經歷せる事蹟を子孫に知らしめんが爲に著述したるものなることは、卷末に記されたるその跋文に就いてこれを知るべし。

中島氏本姓二階堂氏、その祖大藏少輔政行といふ。永正の頃、將軍義植の命を奉じて備中國に來り、淺口郡片島に居城し、後窪屋那高山城主となり、備中國探題に補せられ、更に轉じて賀陽郡經山城主となり、子孫世々此城に居りて重きを成せり。その後裔元行の時、毛利氏の威を中國に振ふに至り、その部下に屬して功あり。天正十年秀吉の征西に當り、高松城主清水宗治を助けて秀吉の大軍に抗し、殊勳を樹てたりき。

此書は、明應以後より天正末年に至るの間、中國に於ける兵亂の事を記せるが故に、中國兵亂記と名づけられたらんも、主として中島氏が、父祖の武功を顯彰することを目的とせしを以つて、その記述せる事項は、概して備中の外に出でず。中にも、天正十年に於ける高松役の如きは、最も委曲を盡せるものといふべし。本書の成れる元和元年は、天正十年を距ること僅に三十二年にして、而も著者は親しくその實戰に與れる身を以つて、その遭遇目覩せる事實を卒直に記せるものなれば、謂はゆる根本史といふべきものにして、凡高松役後の史實を知らんには、全く此書の右に出づるものなかるべし。然るに、從來門外不出の書として、著者の後裔たる中島家に珍襲せられ、専門史家の眼に觸れざりしが故に、これを知るもの稀なりしも、今回所藏主の好意に依りてこれを收むるを得たるは、斯學の爲め裨益すること極めて大なるものあるを疑はず。

此書六卷より成り、いづれも元行氏の編著に係るも、跋文より以後の事蹟は、元行の後裔昌行の追補せるものにして、その記事も亦編者の遭遇目覩せる史實を記せるものなれば、清水氏・中島氏の末路を知らんには、亦必要の記事たるべし。

今回刊行せるものは、中島氏の好意により、原本を底本としたるものなれば、最も誤謬なきを得たるべし。唯、印刷上の都合により、原文は片假名を用ひしも、刊本には平假名を用ひたり。

高松城水攻古圖

配軍諸の時當攻水城松高てしに所す藏所の所纂編料史學大國帝は圖原本
 るは謂とりな圖古の一唯る足にるす憑信も最はに上る知を他其狀の置

